

第1学年 算数科 引き算の問題づくり名人になろう ～『ひきざん(1)』～

学習指導者 井下 修一

見通し 1 学習課題を設定する。[情]【たまるボード】

前時までの学習を振り返り、問題場面が違っても、求残と求部分のどちらもブロック操作の手の動きが同じだから引き算と言えることを確認した。そして、本時の問題場면을具体物とともに提示し、答えの見通しをもたせた後、「これまでの問題と違うのに、どうして答えが2本だと分かったの」と問いかけることで、答えの見付け方を説明しようとする意欲を高めた。



コアラのめすは何匹の問題で、「右手でばいばい」をしました。

「残りは」の問題と同じで、「右手でばいばい」があるから、引き算でした。

【価値付け】既習事項と結び付けながら、考えたいことを明らかにしている姿を、「前の勉強との違いを見つけて、今日考えたいことを見つけているね」などと称賛した。

どうやって答えを見付けたいのかな。

行動 2 答えの見付け方を考え、減法であることを説明する。[粘]【くらべてみタイム】

3 「いくつおおい」の問題づくりを行い、解き方を説明する。

最初に、全体でブロックの並べ方を確認することで、答えを見付けるためのブロックの動かし方に焦点を当て考えられるようにした。ペア交流や全体交流では、自分や友達のブロック操作を見比べ、共通点や相違点を見付けた。その後、本時の問題場面も減法になるかどうかについて説明し合う場を設けた。その際、求残、求部分のブロック操作を補助黒板に位置付けておき、いつでも確認できるようにすることで、本時のブロック操作との共通点を意識しながら、求差の問題場面も減法であると捉えられるようにした。そして、学級全体で問題づくりに取り組み、別の問題場面でも減法が適用できることを確かめた。

鉛筆とキャップをくっつけて、「右手でばいばい」すると、鉛筆が2本多いです。



ぼくと一緒だ。二人とも「右手でばいばい」があるね。これも引き算だね。

今までの勉強と、「右手でばいばい」があるところが同じです。

鉛筆が何本多いの問題も、引き算になります。



【価値付け】減法の意味を拡張した後に、「自分や友達、今まで勉強してきたブロックの動かし方を見比べて同じところを考えられたから、『いくつおおい』の問題も引き算だと分かったね」などと称賛した。

振り返り 4 本時の学習を振り返る。[信]【がんばっタイム】

本時の学習で勉強になったところが自分の中で明確になるように板書を指差し、選べるようにした。選んだ場所とその理由をペアの友達に説明することで、自分の成長に気づきやすくなった。その後、3名の子供に発表を促し、学級全体に説明する場を設けた。

「右手でばいばい」のところが勉強になりました。

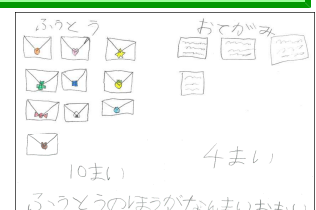
次は、新しい引き算の問題をつくりたいです。



【価値付け】説明後に、「自分の勉強になったことを考えたり、それを友達に伝えたりすることで、分かったことがはつきりしたね」などと称賛した。

考察 (○: 成果, ●: 課題)

- 単元を通して、問題づくりをし、お話通りにブロックを動かす経験を積み重ねることで、日常生活でも積極的に減法を用いようとする子供が出てきた。
- 鉛筆とキャップという組み合わせやすいものを問題にすることにより、具体物の操作が容易にでき、ブロック操作につなげることができた。
- 本時では、ブロックの動かし方に焦点化するために、ワークシートを使用したが、本時で初めて使用したため子供たちは使い方が分かりにくかった。また、思考が可視化できなかったため、教師が机間指導する際に子供の考えが見とれず、意図的な指名ができなかった。



【引き算絵本】